

審査の結果の要旨

新田 真悟

論文「タスクとスキルにみる高齢者の職業構造に関する実証研究」は、就業におけるタスクとスキルから、労働市場の変容を高齢者に着目して明らかにすることを目的とする。同じ職業タイトルであっても、仕事の中身や評価の対象となる熟練度（スキル）は同じとは言えないかもしれない。本論では、人口高齢化に伴い高齢労働者が増加する中、職業構造の変化をより精緻に捉えることを試みる。

本論文は7章から構成される。第1章「高齢化する社会と労働市場」では、労働市場における高齢者の位置づけについて、マクロな時代変化を提示しながら、なぜタスクとスキルに注目することが重要であるか、を述べる。第2章「データと方法」では、主な分析データとして、「社会階層と社会移動に関する全国調査（SSM 調査）」、「就業構造基本調査」、そして「日本版 O-NET」について述べ、タスク・スキルの操作化や測定について説明する。

第3章「高齢期の就業行動」、第4章「職業経歴にみる高齢者の職業構造」、第5章「若年・壮年層と高齢層の職域分離」、第6章「高齢者の職業構造の変化」では、具体的な実証研究が展開される。第3章では、だれが高齢期に働き続けるのか、をリサーチクエッションとして、初職でのスキルに着目して検討する。興味深い結果の一つは、認知的スキルは就労継続チャンスに負の効果を及ぼしており、高齢期にも労働市場に留まる者は初職における認知スキルが低い傾向にあった。第4章では高齢期突入前後におけるスキル水準を、ライフコースの観点から比較検討した。高齢期以降、スキル水準は概して低下する傾向があり、その変化の程度は性別、学歴別に異なっていた。第5章では、職域分離についての世代間比較を行った。特に最近需要が高まる IT 関連タスクや認識タスクにあって、若・壮年層との違いが大きく、高齢者はより単純な職業に就く傾向が確認された。第6章では、高齢者の職業構造の変化を、年齢・時代・コホート効果に区別して検討した。その結果、1930 年代の出生コホートを境に、タスク変化のパターンが異なり、労働市場に参入した時期が無視できないことを確認した。以上の結果を終章に「結論」としてまとめ、今後の展開の可能性に言及した。

以上、本論文は、職業のみならずスキルとタスクに着目することで、高齢労働者の職業構造の見過ごされてきた変容の一端を明らかにしようとした点で意欲的である。その一方、スキルとタスクに着目したことで構造変化のどこが明らかになり、不平等の観点からいかなる意味を持つかについての議論は十分とはいえず、課題も少なからず残された。それでも、多様な分析手法を駆使して、市場の変化を需要と供給の関係から明らかにしようとした点で高く評価できる。

本委員会は慎重に審査した結果、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。